

上越市立柿崎中学校だより 令和5年3月20日発行



第 11 号

せ い し ゅ ん ふ た た び き た ら ず

青春不再来

柿崎区法音寺 392-1 TEL:536-2496 <http://www.kakizaki-j.jorne.ed.jp/>

「青春不再来」は、大廊下に掲げられている木彫の言葉です。

「学習、生徒会、部活動などに、生徒は一生懸命です。悩んでいる生徒もいます。でも、どの生徒も、かけがえのない中学校生活を一杯生きている。」という意味です。

[第 53 回卒業式式辞より]

やがては、社会に力の限り貢献できる人に

校長 大 塚 啓



暗いニュースが飛び交う、そんな日々を送る中で、私は、あるスポーツ選手の発言と実績に、大きな感動を与えてもらいました。そのスポーツ選手とは、車いすテニス界のレジェンド、国枝慎吾選手です。国枝選手は、このたび 28 年間の競技生活を終え、現役を引退しました。

国枝選手は、9 才の時、脊髄腫瘍を発症して下半身麻痺になり、以来、車いすでの生活となりました。その後、テニスを趣味としているお母さんに、無理矢理コートに連れて行かれたのがきっかけで、小学校 6 年生で車いすテニスを始めたそうです。当初、練習をしている際に聞こえてくる何の悪気もない言葉が国枝少年の心に引っ掛かったそうです。その言葉とは、「車いすでテニスをやるなんて、えらいね」という言葉だったそうです。それを聞いた国枝少年は、こう考えたそうです。「車いすでテニスをやっていることが偉いわけじゃない。ぼくは、この状態でスポーツをするしかないんだ。スポーツをしたいというのはみんなも思うこと。特別なことではないよ」そこから、国枝選手の「世の中の人々に車いすテニスを立派なスポーツとして認めさせるぞ」というもう一つの戦いが始まったのです。

それから 28 年の中で、国枝選手は、世界の大会で多くの実績を残し、「生涯ゴールデンスラム」を達成しました。その過程では、言葉にならない苦しみやスランプがあったに違いありません。それを乗り越えて必死に競技する姿を世界中に示し続けたことで、もう今では、だれもが、車いすテニスのスポーツとしての面白さや素晴らしさを認めるに至りました。車いすテニスを立派なスポーツとして認めてもらえるまで頑張り抜いたことは、「すごい」という以外に称える言葉が見つかりません。



そんな最強の選手だと思っていた国枝選手ですが、試合では、すぐに弱気になる自分がいたそうです。それを強気に戻してくれる言葉は「俺は最強だ」という言葉でした。その言葉をラケットに書いて、それを見て気持ちを立て直し、試合に臨んでいたと言います。

何かと自由がきかない車いす生活にもかかわらず、数々の試練を乗り越え、自らの競技だけでなく、パラスポーツの普及、発展に尽くし、やり切ったと言えるテニス人生、挑戦し続けたテニス人生に学ぶものはたくさんあると私は思っています。

卒業生の皆さん、これからの人生を生きるにあたり、ぜひ、高い志と意欲をもって、これまで学んできた知識を礎としながら、自ら問いを立て、その解決を目指してください。この国枝選手のように、「目標をもって、自ら挑戦しようとする心」や「多様性を認め合い、互いに支え合って生きていこうとする心」を忘れないでください。そして、人間として明るく、自分らしく、社会に力の限り貢献できる人に成長してほしいと願っています。

第53回 卒業証書授与式



別れの言葉

卒業生代表

吉崎 智成

雲は白く流れ、グラウンドを渡る風の中、僅かに残った雪の上に、春の日差しが感じられるようになりました。そんな中、私たち 57 名は思い出深いこの校舎から巣立ちます。新しい試みに挑戦し、数々の困難を乗り越え、今ここにいて喜びと支えてくださった皆様への感謝でいっぱいです。そして少しの別れの悲しさと未来への不安も。



3年前の4月、私たちは大きくぶかぶかの制服に身を包み、このときもたくさんの希望と少しの不安を胸に入学しました。中学生になった！という喜びをかみしめながら始まった中学校生活。そんな喜びもつかの間、新型コロナウイルスの影響で私たちの日常はあっという間に奪われてしまいました。新しい友達と一緒に、笑顔であふれていた生活が当たり前ではなくなってしまいました。

長い一斉臨時休校を経て再開した学校生活は、私たちが聞いていたものとはかけ離れたものでした。行事や大会の中止、数々の制限。私たちのそれまでの経験とは全く違う毎日でした。そんな中でも先輩たちは、できないことを嘆くのではなく、できることを模索し、新しい中学校生活を確立してくださいました。コロナ禍という出口の見えない状況の中、新しい生活の中で喜びを見つける日々が始まりました。

コロナ禍の下での生活が続いた3年生の4月。「主体性+自主性」をスローガンに、私たちの最後の年が始まりました。たくさんの新しいことに挑戦する一年が始まりました。

最初に手がけたのは柿崎中学校初の体育祭5月開催でした。準備期間が短い中、手探りでのスタートでした。約1ヶ月しかない準備期間、軍一丸となってたくさん話し合いを行い、時には意見がぶつかり合い、涙することもありました。それらを乗り越えて準備を進め、迎えた本番。5月とは思えない、熱い、熱い戦いを繰り広げました。今でも鮮明に思い出されます。

体育祭を通じて学んだのは、互いの思いを汲み、互いが生きる方法をさぐる難しさでした。しかしその困難な課題を乗り越えたときの達成感、自分たちががんばることでみんなが喜んでくれる姿を目の前にしたときのうれしさはこの上ないものでした。この経験は私の人生において大きな財産となりました。





3年ぶりに行われた修学旅行も大きな思い出です。2泊3日で訪問した奈良県では、教科書でしか目にしたことの無い文化財を巡りながら、学年やクラス、班のみんなといつもとはひと味もふた味も違う時を過ごしました。当たり前のことのできるのがこんなに嬉しいものかと改めて感じた修学旅行でした。

コロナ禍の下での3年間、朝まだ眠い目をこすりながら登校し、クラスの人々と授業を受ける。昼休みには体育館で汗を流し、友達と笑い合いながら下校をする。そんな何気ない日々が当たり前ではなくなった3年間。だからこそその大切さを身をもって感じた3年間でした。

先生、職員の皆さん。とにかく元気がありすぎる私たちを、進路の実現に向けて時には優しく、時には厳しく指導してくださいました。ありがとうございました。これまでの教養を胸に、私たちは夢や目標をかなえるために、全力で突き進みます。

在校生の皆さん。学年の壁を越え、仲良くそして楽しく接してください、ありがとうございました。一緒に過ごした皆さんはきっとまた新たな挑戦を続け、柿中をより高いところに押し上げてくれると信じています。楽しむことを忘れず、力を合わせて前進してください。

辛いとき、悲しいときに一番近くで支えてくださったのは家族の皆さんでした。嬉しいときも一緒に喜んでくださったのも家族でした。関係が深い分、ぶつかり合ったこともあったと思います。でも最後まで私たちを信じ励ましてくださったからこそ、私たちは笑顔でこの場にいるのだと思います。いつか恩返しができるよう、がんばりますので、これからも応援をお願いします。

最後に、ここで出会い、3年間苦楽をともにした57名の皆さん。3年前には知らない名前ばかりだったのが、教室で、授業で、部活動で呼び合った名前は、一生の宝物です。またいつか、成長した姿で思い出を語り合いましょう。

私たち57名は、今柿崎中学校から旅立ちます。柿崎中学校卒業生としての自覚と責任を持ち、新しい世界に全力で羽ばたくことをここに誓い、お別れの言葉といたします。皆さんさようなら。



送る言葉

在校生代表 山本 結月

卒業生の皆さん、ご卒業おめでとうございます。在校生一同、心よりお祝い申し上げます。皆さんは、いつも私たちのよきお手本であり、精神的な支えでもありました。あふれる情熱をみなぎらせ、仲間とスクラムを組んで活動する姿は、夏の海のように輝き、常に大きな存在感を私たちに示してくださいました。そんな皆さんは、私たちのあこがれであっただけでなく、柿崎中学校の活動をけん引する原動力であったと、あらためて実感しています。



皆さんの情熱とチームワークが最大限に発揮されたのは、なんといっても柿中二大行事の体育祭と合唱コンクールです。体育祭には、私たち生徒の希望と実施可能な内容にすることの両立が求められました。皆さんは、短い期間の中でアイデアを出して話し合ったり、必要な用具をそろえたり、時には私たちに向けて、丁寧に説明やアドバイスをしてくださいました。3年生にとっては負担が大きかったと想像しますが、出来上がったパネルを見た時の感動は、今でも、あの日のままよみがえるほどです。また、ダンスは振り付けや構成がとても个性的で、練習の段階から楽しむことができました。妥協することなく、やりたいと考えたことを形にしようとする皆さんの意思を、強く感じた体育祭でした。そして、やりたいことを、どうすれば実現できるかを第一に考え、前へ進めば、大きな達成感と喜びが生まれ、集団として成長できるということを、私たちは皆さんから教えていただきました。



合唱コンクールの皆さんの歌声は、まさに圧巻でした。練習期間中、昼休みに渡り廊下を歩いていると、3年生の教室から歌声が聞こえてきたことを思い出します。全員が、同じ方向で合唱コンクールと向き合っていると感じ、うらやましくもありました。仲間と心をひとつに歌い、競い合って高め合う姿は、歌声とともに私たちの心に深く刻み込まれています。

日常生活においても、皆さんとの思い出がたくさんあります。部活動では、後輩のことを気かけ、試合に負けたり落ち込んだりしているときにはフォローし、チーム全体のモチベーションを高めて居心地の良い雰囲気づくりをしてくださいました。休み時間や教室を移動するときには、いつもはつらつとした態度で声をかけてくださり、大きな笑い声が飛び交うような、心の通い合う会話を楽しんだこともよい思い出です。これまで、皆さんが示してくださった「これぞ柿中生」の姿を、私たちは受け継いでいきます。今だからこそできること、できる方法を考え、主体性と自主性をさらに磨き、これからは新しい歴史をつくっていきます。

様々な場面で、多くのことを教えてくださった3年生の皆さん、皆さんが歩いていく道にも、これまでと同じように情熱と優しさ、そしてユーモアがあふれていることを、私たちは願っています。困難なことに会っても、周囲の人たちとのチームワークを大切に、恐れることなく挑戦し続ける姿勢を忘れないでください。



最後に、皆さんが、いつも私たちにとって大好きな先輩でいてくださったことに感謝し、贈る言葉といたします。

